

所属・資格 心理学科・教授

申請者氏名 岡田 和久

研究課題		中年期以降の臨床心理士に対するイメージとニーズに関する探索的研究（3）
報告の概要	研究目的 および 研究概要	岡田（2023）は臨床心理士とその心理療法やカウンセリングに対するイメージとニーズについて、中年期以降の調査対象者が使用した言葉の頻出語の差異を検討したところ、中年期群は臨床心理士やカウンセリング等を複雑な心的操作を要するものと認識する一方、高齢期群は複雑な心的操作ではなくシンプルに知ることのできるものと認識している可能性を報告した。しかし、この調査は文脈を切片化した頻出語を分析対象としていたため、本研究では、前報（岡田，2023）のデータを用いて文脈を考慮したコーディングルールを設定し、各群で使用されるコードの差異を検討することを目的とする。
	研究の結果	KH Coder の抽出語リストに出力された全 743 語のうち、3 名以上の使用が認められた抽出語から 39 個のコード名が生成され、そのうち 27 個を臨床心理士のイメージ、12 個を臨床心理士へのニーズ、に分類した。そして、中年期群（45～64 歳）、准高齢期群（65～74 歳）、高齢期群（75～89 歳）の 3 群間において各コード名の使用者数の比率の差を Fisher の正確確率検定（全体の検定）を行ったところ、イメージでは「スクールカウンセラー」「治療」「生活」「原因」（順に $p=.014$; $p=.065$; $p=.073$; $p=.075$ ）、ニーズでは「気づく」「整理」「サポート」「受容的態度」（順に $p=.008$; $p=.040$; $p=.060$; $p=.093$ ）で有意差、有意傾向が認められた。また、各群内でコード名の階層的クラスター分析を行った結果、クラスター数（イメージ/ニーズ）は、中年期群が 5 個/3 個、准高齢期群が 9 個/4 個、高齢期群が 7 個/3 個となった。
	研究の考察・反省	本結果より、中年期群は「スクールカウンセラー」という心の専門家、「治療」的な会話、「原因」の探求といったイメージが強く、問題解決につながる「サポート」と「気づき」が得られる関わりを求めている。また、准高齢期群は日常の「生活」にかかわる会話や「原因」を探るイメージが強く、「受容的態度」による傾聴や関わり、気づきが得られるサポートによる心の「整理」を求めている。一方、高齢期群は「治療」や「原因」の探求や「気づく」ことよりも知識的に知ることを求めている。社会情動的選択性理論（Carstensen, 2006）を援用すると、将来の時間が十分にあると認識する中年期群は発展的な知識の探求などに労力を費やす一方、将来の時間があまり残っていないと認識する高齢期群では労力のかからない知的理解を求める可能性が示唆された。以上のことから、臨床心理士は中年期以降の対象者への支援において、各年代に応じて探求的あるいは心理教育的な関わりを選択することが有用と考えられた。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	研究発表 研究会名 発表テーマ 年月日/場所	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>○研究発表： 日本心理学会第 88 回大会 中年期以降の臨床心理士に関するイメージとニーズ（2）——KH Coder における中年期、准高齢期、高齢期のコードの差異 2024 年 9 月 6 日～8 日/熊本城ホール</p> <p>○研究成果物： なし</p>